

誰だって「自分の家」に住み、  
人間らしく生きる権利がある



阪井土地開発株式会社代表取締役  
**阪井ひとみさん**

● 聞き手 白井美樹 (ライター)

不動産会社を経営する阪井ひとみさんは、18年前から精神障害などがある社会的弱者に入居支援を行っている。2008 (平成20) 年には、同志とともにNPO法人「おかやま入居支援センター」を設立し、より強靱なサポート体制を整えた。現在、支援をしている人は今日までに延べ450人。みんなからは「おばちゃん」という愛称で呼ばれ、多くの人から親しまれている。

阪井さんがこつした支援をするようになった経緯や背景には、どんなことがあったのだろうか。

**牢獄のような部屋で暮らす  
精神障害者**

— 最初に、不動産会社を設立したいき  
さつを教えてください。

**阪井** 父が建築土木の会社を経営しており、不動産がらみで何度もだまされ、1億円以上も損をしていたのです。そこで、そんなことが起こらないように、防策として私が宅建資格を取ることになりました。1990 (平成2) 年に

開業し、不動産屋になって今年で25年目。その前は、普通に主婦をしていたのですけどね (笑)。

— 精神障害者の支援をしようと思った  
きっかけは？

**阪井** 18年前のことですが、入居者の1人から電話がありました。「誰かが俺を殺そうとしている」というのです。その人は、元は大手メーカーの岡山支店長として単身赴任していたので

**PROFILE** ● さかい・ひとみ ●

阪井土地開発株式会社代表取締役、NPO法人おかやま入居支援センター理事。1996年より精神障害者のための住居あっせん、入居後のサポート等の入居支援活動を始める。その活動が評価され、2014年には第10回精神障害者自立支援活動賞 (リリー賞) 支援者部門を受賞。

すが、定年後に家に帰ると、奥さんから離婚届を突き付けられたそうです。

離婚後、また岡山に戻ってきて、酒浸りの日々を過ごすうちに、統合失調症になりました。私が付き添って精神病院へ連れていき、1カ月入院した後、またアパートに戻ってきました。家族に連絡を取っても、なかなか会いに来

なくて、「世間体が悪いので、精神病のことは内密にしてほしい」という冷たい反応だったのです。

この一件から、私は精神障害者の置かれていた不遇な状態に問題意識を持つようになりました。

—実際に、どういう流れで入居支援を始めたのでしょうか。

**阪井** このときに関わった病院から、数カ月後に、「入居者の退院後の入居先を相談したい」という連絡がありました。そこで病院に行く、退院後の部屋が確保できないために、精神科病院から長年出ることができないでいる人や、退院したとしても劣悪な環境の部屋で暮らさざるを得ない人がたくさんいることを知りました。

私は不動産業なので、そういう人たちが何とか住める環境をつくりたいと思うようになったわけです。

という人たちが何とかしてくれないのかと思っただけですが、「行っただけ本人が家に居なかったので対処できなかった」との答え。これには疑問を感じましたね。外壁だけをみても、どんなに劣悪なのか分かるはずじゃありませんか。

### 入居支援活動を開始するも さまざまな壁に直面

—そこで阪井さんご自身が、精神障害者の部屋のあつせんに乗り出したというわけですね。

**阪井** そうなのです。私が管理するアパートやマンションに住まわせるだけでなく、ほかの不動産屋や大家さんにも、精神障害者を住まわせてくれるように掛け合いました。

でも、ここでもさまざまな壁を感じましたね。独りで孤独に暮らしていた人は、多くの場合、部屋を契約する際

—精神障害があると、実際、部屋を借りられないケースが多いのでしょうか。

**阪井** みなさん部屋を選ぶときは、いろいろな部屋を見て決めますよね。でも精神障害者は、部屋を見る以前に、不動産店の店頭で断られることがほとんどです。そのため、本当は自分で生活ができるのに、何十年も長期入院している人が少なくないのが現実です。

また、部屋を借りられたとしても、劣悪な部屋を大家や不動産屋から紹介される場合が多いのです。実際に精神障害者が退院時に紹介されたというアパートに行ってみると、どこもあまりのひどさに驚くばかりでした。

「北向きの部屋で窓がない」なんていうのはまだマシで、雨漏りがしていて畳がグチャグチャに朽ちていたり、台風で割れた窓ガラスがそのままだったり、白アリが群生して床が腐りきって

いたり、トイレや風呂が壊れたままだったり……。そんな部屋で多くの精神障害者は暮らしているのです。

—大家さんは、なぜ部屋を直してくれないのですか？

**阪井** 風呂などを修繕するのは大家の責任だと私が指摘すると、「善意で貸してあげているのに」と反発されたこともあります。そんなふうなので、入居者は、「直してくれなんて頼んだら、追い出されるのではないか」と恐れています。

中には、さらに悪徳な大家もいました。本来はもっと安い部屋なのに、岡山では生活保護受給最高金額（3万7000円）で貸していたのです。

ちなみに、精神障害者のところには、年に2回、ケアマネージャーや保健師が訪問に行くことになっています。そ



精神障害者が住んでいた劣悪な住居の写真を集めたパネル

の保証人がいないため、借りられない場合が多いです。そこで、これはやってはいけないことです。ケースワーカーや後見人が保証人になったりするケースも見られました。私自身、保証

人なしで貸したこともありますし、保証人になったこともあります。

また、精神障害者に貸すのを心配している大家さんが、よく口にするのは、「壁に穴を開けられる」「暴れたらどうしよう」「世間体が悪い」「ほかの入居者が出てしまうのでは」といったことです。でも、私の経験上、そんなことはなくて、自分が住みたいと思っ

て決めた部屋なら、とても大事に使ってくれています。

— NPO法人「おかやま入居支援センター」を立ち上げた背景は？

阪井 初めは私一人で入居支援をしていましたが、それとかなかなか物事がスムーズに進みませんでした。生活保護申請が受け入れられなかった



ホームレスだった人が住む家賃1万円のアパート (写真は入居者のヤマちゃん)

退院してアパートに入居した後も、一軒一軒回って、普通の生活ができているか、食生活などの生活状況のチェックも行っています。さらには、自分でお金を管理できない人のお金の管理や、デイサービス、病院に関することなどもアドバイスしているのです。

この5年間で、およそ100人以上の精神障害者が退院し、自分が気に入った部屋に住み、自由な生活をするようになっていきます。また、汚い部屋から、きれいな部屋に住み替えられた人も大勢います。

—きれいな部屋に住むようになったことで、精神障害者の様子は変わりましたか？

阪井 ポロポロのアパートに暮らしていたときは、お風呂にも入らず、ザンバラ髪だった女性が、きれいなアパ

ルトに転居したとたん、きれいな服を着て化粧もするようになりました。やはり、人間はきれいなところに住まないと心が育たないということをしみじみ実感しましたね。衣食住が大事といわれていますが、住が満たされると、衣食も変わっていくものです。

ちなみに、私は6年ほど前に7階建ての中古マンションを丸ごと買い取り、一般の人とともに退院した人を受け入れています。1階ロビーには談話スペースを設けてあるのですが、夕方になると、たくさん住民がここに集まってきます。そして、困ったこと、病気のこと、職場のこと、人間関係や家族のことなど、自分が話したいことを誰かに聞いてもらっているのです。

—入院していたときや、汚い部屋に独りで閉じこもっていたときと比べ、病状も良くなっているのでしょうか？

り、保証人がいないために、入居を断られたり……。

ところが知り合いの弁護士に話を通してもらったりすると、一発で許可が下りることが分かりました。そこで、弁護士や医師、看護師、社会福祉士、社会労務士、不動産業者、そして行政など、さまざまな分野の専門家たちと連携して、精神障害者を支えるネットワークを一緒に作りました。

きれいな部屋に住み、おしゃべりをするだけで、心も元気に

—この支援センターでは、具体的にどのような活動をしているのですか？

阪井 保証人がいないのが理由で退院できなかったり、劣悪な部屋から新しいアパートに引っ越せなかったりする人が、不安なく快適な住環境で暮らせるようにサポートしています。

阪井 病状の改善には、談話スペースが大いに役立っていると思いますね。同じ障害があるので、「幻聴」や「妄想」の苦しさもお互い理解でき、支え合っ

て乗り越えています。幻聴が始まると、誰かがそれに気づいて、同じアパートの住人に知らせた



阪井さんが管理する1ルームマンション。

り、私に教えてくれたりします。おかげで、病院や訪問看護ステーションなどに連絡して、早く対処をすることができるようになりました。そのため、我慢して体調が悪くなって事故を起こしたり、長期入院や閉鎖病棟に入院したりすることもなくなっています。

最近では、妄想などのせいで家族と離れて一人で暮らしていた人が、家族と一緒に住み始めたケースもあります。また、病気が原因で離婚した人が、病気が良くなって復縁した例もあります。

### ホームレス状態の人たちに1万円の部屋を

「ところで、阪井さんが支援しているのは、精神障害者だけではないそうですね。

阪井 はい、精神障害者以外にも、虐待を受けた人、刑余者、ホームレス、

した。その大家さんに掛け合って、一部屋1万円で貸してくれたら、私が16部屋すべての部屋を一括して借り上げる条件を言うと、貸してくれることになったのです。

現在、このアパートは満室。定住できる場所がある最大のメリットは、住民票がとれて、履歴書を書けることです。おかげで、ここに住むようになった元ホームレスたちは、いろんなところに働きに行けるようになり、生活ぶりも改善してきました。また、まだそんなに稼げない人も、居住実態があれば、生活保護を受けられるようになります。

「そのほかの社会的弱者の支援で、何か特徴的なお話はありますか？」

阪井 最もリスクが高いのは、未成年者との契約ですね。不幸にして、親と一緒に暮らせない子どもは、児童保護

未成年者、身寄りのない高齢者など、いわゆる「社会的弱者」と呼ばれる人たち全般を支援しています。

ホームレスの人たちに話を聞いたところ、「お金があつて家賃が払えるなら、ちゃんとした部屋に住みたい」とのこと。そこで、「いくらなら家賃が払える？」と聞くと、「1万円なら払える」と言った人がいたので。そこで、私は家賃が毎月1万円の部屋探しに奔走しました。

すると、以前、学生の下宿だったアパートがそっくりそのまま空いていることを知りま

施設で育ちますが、16歳になると施設を出ないといけません。でも、その年齢だと賃貸契約ができないので、寮を持つている会社に就職するしかありません。しかし、遊技業や夜の商売などしかなく、どんどん転落の人生を歩んでいく未成年者が多いのです。



阪井さんが買い取ったマンション、「サクラソウ」の談話スペース

でも、私は、契約能力のない未成年者も受け入れるようにしています。明日を担う子どもたちを大事にしたいと思うからです。

こうした入居者が成人式を迎えるときには、女の子には振り袖を、男の子にはスーツを着せ、成人式に連れていきます。この振り袖やスーツは活動に共感してくれた人が寄付してくれたものです。20歳は大きな節目。「これからは大人なんだぞ」「責任を持って生きていくんだぞ」という意識を強く持ってもらいたいと考えています。

### 入居者のニーズに合わせた部屋を

「本当に、社会的弱者に行き届いた支援をなさっていますね。」

阪井 いえいえ、私は単なる「ハコモノ屋」だと思っています。ちゃんと家賃もいただいているので、ビジネスで



精神障害者が多く集まる、安くておいしいうどん屋さん

やっています。ビジネスにのつかれば、おのずと社会が動いていってくれると考えているからです。ただし、生活保護の受給が3万7000円なので、だいたいはその範囲で部屋を貸すようにはしていますけれどね(笑)。



近々精神障害者が集うカフェと展示室になる予定の古い空き家

### どんな人だって 社会的弱者になりうる

— 今後は、どんなことをしていきたいと思っと思っていますか？

**阪井** 岡山駅からほど近いところに、元精神保健福祉センターの所長だった

先生がやっている診療所があり、ウチの同居者もお世話になっています。その隣に、ちょうど空き家があるので、そこに当事者が働くカフェと精神障害のことを知ってもらう資料館を造ろうかと考えているところです。

精神障害者は、現在もなお過酷で不遇な状況に置かれています。そうしたことを展示し、「同じ人間としてどうなんだ」ということを広く発信していきたいらいいと思っっているのです。

— そういえば、先日イタリアに研修に行かれたとか。どのようなことを学ばれてきたのですか？

**阪井** トリエステやトレントという町に勉強に行ってきました。かつては、これらの町でも精神障害者は、日本同様に病院の檻のような部屋に入れられていましたが、現在、精神病院はありません。特にトレントでは、当事者と

家族と一緒に活動する「UFE(ウフェ)」という組織があり、そこには、障害のある人もない人も一緒に暮らすという社会が成り立っています。

日本の場合、偏見や差別が大きく、精神障害の手帳を持っていたり、生活保護を受けていたりすると「働くな」といった風潮があります。このために働く意欲を失っている人も多くいます。これはおかしいと思います。「毎日がんばれなくても、できる日は何かやろうよ」「もつと障害のことを社会に分かってもらおうよ」と声を大にして言いたいですね。

社会のために働く機会を得られたら、精神障害者をもっと自由に自分らしく生きられるはず。私はUFEのような活動を岡山でもやりたいのです。

取材の最後に阪井さんから、「支援している450人の中で、2つだけない職業、肩書きがあります。それはな

んだと思っいますか？」と質問された。まるで想像もつかなかったが、答えは宇宙飛行士とオリンピック選手とのこと。このことからすれば、どんな人だって社会的弱者に成り得るわけだ。

話の途中途中で、「アッハッハー」と豪快に笑う阪井さん。その頼もしい姿に、社会的弱者の人たちは、大きな安堵の気持ちをもたらしているのだろう。



将来的にUFEのような活動をやりたいと語る阪井さん